

ヤコブの手紙 1章 19節～27節

19 わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。20 人の怒りは神の義を実現しないからです。21 だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。22 御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。23 御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。24 鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。25 しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せ(幸い)になります。26 自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。27 みなしごや、やもめが困っている時に世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です。

『御言葉を行なう人になりなさい』

◆2017年は宗教改革500周年の記念の年でした。『福音時報』では1年間、南純牧師の連載がありました。色々のことを教えられましたが、私は「ルター戦いは命がけだったのだ」ということを強く覚えました。彼はその信仰の故に、教会から破門され、そして国会の決議で国外追放の身となりました。しかし、彼は神様を信じてひるむことはなかったのです。そのことは彼が作詞・作曲した下記の讃美歌377番によく現れております。

1 神はわが砦わが強き盾 全ての悩みを解き放ち給う
悪しき者おごりたち 邪な企てもて戦いを挑む
2 打ち勝つ力は我らにはなし、力ある人を神は立て給う
その人は主キリスト、万軍の君、我と共に戦う主なり

3 悪魔世に満ちて攻め困むとも我らは恐れじ守りは固し
世の力さわぎ立ち 迫るとも 主の言葉は 悪に打ち勝つ
4 力と恵み 我に賜わる 主の言葉こそは 進みに進まん
わが命わが全て 取らばとれ 神の国は なおわれにあり

◆このような信仰の戦いを貫徹したルターが、『聖書の序言』という書物の中で、今朝私たちが読みます『ヤコブの手紙』を『藁の書簡』と呼びました。「価値低きもの」との意味です。この『ヤコブの手紙』の著者「ヤコブ」とは、伝統的にはエルサレム・キリスト教会の「柱」と目されていた主イエス様の御実弟のヤコブとされています。そしてこのヤコブはユダヤ人の「生活習慣」を重んじた人のようであります。ガラテヤ書2章11節～14節において、使徒パウロは、使徒ペトロを面と向かって非難したことが記されています。それは、ヤコブの許から人々が来るまでは、ペテロは異邦人と自由に交わり、食事をしていたのに、その人々をはばかりて以前のユダヤ人としての習慣に戻ったことを、「偽善」として叱責したのです。

◆しかし、「信仰の戦い」と申しまして、その人が生きる時と所で戦いの焦点は変わります。「信仰の父」アブラハムの場合は「自分自身」との闘いでした。ペトロの場合は「裏切りの罪」の問題でした。パウロの場合は「神の義」の問題でした。そしてルターの場合は「信仰義認」でした。そしてヤコブの場合は「信仰と一対の行為」でした。時代は下ってボンヘッファーの場合は、「キリストへの服従」の一点でした。そして今日・ここに生きる私たちは、ヤコブを通して、「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」との勧めを聴くのであります。

◆ルターによる宗教改革の旗印は、①聖書のみ ②恵みのみ（信仰のみ）＝（信仰義認）③万人祭司等々でありました。ルターもカトリックの修道士でありましたが、ルターの見れば、「免罪符」を安売りすることによって、「ペトロ寺院」建築の資金を集めることは、それこそ「恵みの安売り」であり、キリストにおける神の恵みを無にしようと思えたのです。そこでルターはいわゆる『95カ条の提題』によって、その問題を問うたのです。そしてその勢いで、信仰における「行為」を重視する本ヤコブ書を「藁の書簡」と呼んで、値打ち低きものとしたのですが、果たしてこのルターの評価は正しかったと言えるでしょうか。

◆私自身は、ルター先生は、ヤコブ書を「藁の書簡」と呼ばない方が良かったと思います。いずれにせよ人間の信仰の是非、信仰義認の内実の正当性を判断するのは、人間のすることではなく、神様だけが為さることです。それこそ神様の専権事項であります。ヤコブの関心事は、神様が義とされるところの信仰はいかなるものであるかということが関心事でありました。ですから聖書を読む時には、時代状況を捨象してはならないのです。

◆さて、今日一緒に読みますヤコブの手紙1章19～27節を、もう一度読んでみます。「19わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。20人の怒りは神の義を実現しないからです。

21だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。22御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。23御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。24鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。25しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。26自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。27みなしごや、やもめが困っている時に世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心です。」

◆ここで、「信心」という言葉が3度も出て来ます。「スレースケイア」というギリシャ語なのですが、①宗教的儀礼、②礼拝、③勤行、④宗教、等々の意味があります。そして勤行(ごんぎょう)とは、仏前に読経をしたり、回向をする事です。そして回向とは、読経や御布施によって、死者の冥福を祈ることです。ヤコブの視野は広いと思います。キリスト教を始めとして、すべての宗教の真価を問うていると言えましょう。そして、25節に、「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります」とありますが、この「幸せ」は山上の説教の冒頭の“幸いなるかな心の貧しき者。天国はその人のものなり”の「幸い」という言葉です。神様の御言葉を聞いて、信じて、行う人が幸いに与かるのです。

◆さて、私たちが聖書において、「信仰の父」として敬愛しているところのアブラハムの場合には、神様を信じる事と、神様の御言葉を行なう事とは、同じ一つの業の表と裏であります。神様を信じ、信頼するのは、その真実な、無比なる御愛に捕えられてのことです。だからこそ、神様の御言葉を真に受けて、無条件に従うのです。百歳にして与えられた独り子イサクの奉献の行動こそは、正に「信仰の鉄人」という感じがいたします。このヤコブ書も2章18節～24節でこうっております。「02:14 わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。02:15 もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、02:16 あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ

与えないなら、何の役に立つでしょう。02:17 信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。02:18 しかし、「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」と言う人がいるかもしれません。行いの伴わないあなたの信仰を見せなさい。そうすれば、わたしは行いによって、自分の信仰を見せましょう。02:19 あなたは「神は唯一だ」と信じている。結構なことだ。悪霊どももそう信じて、おののいています。02:20 ああ、愚かな者よ、行いの伴わない信仰が役に立たない、ということを知りたいのか。02:21 神がわたしたちの父アブラハムを義とされたのは、息子のイサクを祭壇の上に献げるという行いによってではなかったですか。02:22 アブラハムの信仰がその行いと共に働き、信仰が行いによって完成されたことが、これで分かるでしょう。02:23「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」という聖書の言葉が実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。02:24 これであなたがたも分かるように、人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません。」

◆ルターの宗教改革は、正に命がけの戦いでした。そしてアブラハムの信仰は、自分の命よりも大事な独り子イサクを神様の御言葉に従って捧げる程のものでした。ルターの時代も、ヤコブの時代も、アブラハムの時代も、いつも信仰の闘い、誘惑、試練がありました。そしてボンヘッファーの云う「神様の高価な恵みを安価な恵み」に変えて安んじてしまう誘惑があります。御言葉を行なう歩みに精進いたしましょう。

◆「御言葉を行なう人になりなさい」と言われると、律法主義的にきこえるかもしれませんが。しかし、それは御言葉を真に受ける事なのです。神様の御言葉、神様の戒め、そのすべてが信頼に値する事を経験した者の喜ばしい従順なのです。その御言葉の全てが、善意から、愛から発せられている事を経験した者の喜ばしい服従なのです。そして、信仰の試金石は27節にあるように、みなしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れのない信心なのです。

◆お祈りいたします。

恵みと憐れみと御愛に満ち給う主イエス・キリストの父なる神様。私たち如きものがあなたの赦しと祝福に与ることを許されていますことを心から感謝いたします。どうか、いよいよあなたの御憐れみにひたすらおすがりし、あなたの御言葉を信じ、真っ直ぐにあなたに聞き従う者たちとならしめて下さい。どうかあなたの御栄光が現れますように。これらの祈りを主イエス・キリストの御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。